

【論文】

日・中・韓接触場面における討論の分析 — 談話における「逸脱」に注目して —

川 口 良

An Analysis of a Discussion among Japanese, Chinese and Korean Postgraduate Students : Focus on the Variation in the Discourse

KAWAGUCHI, Ryo

要旨：本研究では、大学院の「演習」の授業における討論場面を録画・録音したデータを談話分析の対象として、日本語を母語とする日本人学生と中国語及び韓国語を母語とする留学生によって、どのようなインターアクションが行われているか観察し、記述した。談話展開やスタイルに基づく「逸脱」部分に着目し、そこでどのような相互行為がなされているか、非言語行動を含めて分析した。その結果、日常会話の話体を用いるというスタイルの「逸脱」によって、当該場面が生き生きと描出され、参加者がその場面に入り込んでいく様子が確認された。日常会話によって共同構築された談話が、国を越えて事態を共有し、問題の理解を深めていくプロセスとなることが分かった。さらに、参加者同士がチームとなってその成員として発話するという現象も観察された。このようにして形成された「共感のネットワーク」（中田1991）によって、後半の「発表」談話には、参加者間の相互作用的な「討論」が構築されたと言える。

1. はじめに

1.1 問題の所在

財務省の発表によれば2014年6月末現在の在留外国人数は2,086,603人 (http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei_ichiran_touroku.html) と日

本の総人口の2%以上を占め、日本学生支援機構の発表によれば、2013年5月1日現在の留学生数は135,519人 (http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/data13.html) であるという。また、国際交流基金が世界各国の日本語教育状況を把握するために3年ごとに行っている「海外日本語教育機関調査」では、2012年の世界の日本語学習者数は3,984,538人と、2009年の前回調査から9.1%増加したことが報告され、128か国、8地域の合計136の国と地域で日本語教育が実施されていることを確認している (<http://www.jpf.go.jp/j/about/press/dl/0927.pdf>)。これらの数字が示すのは、国内外を問わず、異なる言語や文化背景をもつ人々が日本語を用いてインターアクションを行うコミュニケーション場面が一般的なものになりつつあるという事実である。このような世界の急速なグローバル化を背景として、現在の大学または大学院においても、さまざまな母語をもつ留学生が日本語非母語話者として授業に参加することも日常的なものとなりつつある。これらに見られる、異なる言語、文化背景をもつ参加者によるインターアクション場面は、「接触場面 (contact situation)」と呼ばれ、異文化コミュニケーションが行われる言語場面と考えられている。

接触場面は母語場面 (native situation) に対置されるコミュニケーション場面であり、母語話者 (native speaker) と非母語話者 (non-native speaker) 間の接触が最も典型的な接触場面と考えられて、日本語教育や第二言語習得の立場から研究が進められてきた。その研究の多くは、接触場面と母語場면을比較することによって学習者の言語行動が母語話者のそれと異なるといかに異なるかを分析し、その違いを接触場面における言語問題と捉え、目標言語である母語場面の言語行動を非母語話者に習得させることを目的とするものと言える。つまり、そこには、言語習得が目標とすべきは母語場面における日本語母語話者同士のインターアクションであり、接触場面における言語問題は言語能力やコミュニケーション能力が不十分な日本語非母語話者によって引き起こされるという前提がある。

このような前提は、多くの語学教師に無意識に共有されているものかも

しれない。しかし、この前提に存在する「日本語母語話者」対「日本語非母語話者」という二項対立的なカテゴリー化は、学習者に日本文化への同化を無意識に強制化するだけでなく、母語話者を標準（あるいは規範）と捉え、非母語話者を標準（あるいは規範）からの逸脱者と捉える図式を成立させる危険性を孕んでいる（岡崎1994・2003、Firth & Wagner1997、大平2001、川口・角田2005、村岡2006、川口・角田2010、など）。また、この「日本語母語話者－日本語非母語話者」という二元論的なカテゴリー化は、母語話者側の多様性を無視していることにも問題があると言えるだろう（エリス2000、大平2001、川口・角田2005、川口・角田2010、など）。そこには、共通の言語コミュニティに属する者は均一のルールに従って言語行動をしている、という暗黙の了解が存在する。実際は、日本語母語話者であっても、常に均一のルールに従って行動しているわけではなく、「あたかも非母語話者、学習者特有の行動であるかのように表現されてきたものの中には、実際には母語話者であってもなんらかのコミュニケーション上の問題が生じた場合に取りうるる行動であるものも多い」（森2004：p.196）のではないだろうか。

さらに、相手の言語理解を促進するために母語話者がとる会話調整ストラテジーとしてフォリナー・トークの存在が知られているように、接触場面では母語話者側が種々の調整行動をとる（岡崎1994・2003、伊集院2004、樋口2009、加藤2010、など）ことから、母語場面における日本語母語話者同士のインターアクションを言語習得の目標に置くことの有効性に、疑問が生じてくる。「相手言語場面（接触場面のこと：引用者注）の言語問題とは、じつは母語場面の規範が極端に強調されることからくる問題」（ファン1999：p.48）であるのかもしれない。「母語話者と非母語話者の接触場面において見出される言語問題は、本来は母語場面に限定されるべき日本語の規範が接触場面にももち込まれるために発生する」（真田編2006：p.54）とも考えられるのである。

一方、ファン（1999・2006）は、従来の接触場面に加え、「参加者いずれ

もが母語ではない第三者の言語によってインターアクションを行う場面」を「第三者言語接触場面 (third-party language contact situation)」と呼んで (ファン1999 : pp.37-38)、日本語の中間言語しかもたない非母語話者の日本語会話のあり方やそこで生起する言語問題の性格を明らかにしようとしている。第三者言語接触場面は、日本語教育場面における母語話者ではない日本語教師と学習者、学習者同士のインターアクションをはじめとして、留学生寮や下宿先、アルバイト先、職場など、近年の在日外国人の増加を背景とした日本語ネットワークを考えると、日本語非母語話者にとっては頻繁に行われているインターアクション場面であると言える。このような第三者言語接触場面における日本語会話の言語問題は、冒頭に述べたように、136の国と地域において学ばれる日本語によるコミュニケーションのあり方にとって、重要な意味をもつものと捉えられるだろう (真田編2006)。

1.2 本研究の目的

以上のような議論を踏まえ、それでは、接触場面研究はどのような視点から行われるべきなのだろうか。以下、村岡 (2006) の議論を中心に考えてみたい。

村岡 (2006) は、接触場面を、J.V.ネウストプニーによる言語管理理論 (Neustupny1994) と密接な結びつきを持って発展してきたものとして捉え、次のように述べている。

接触場面研究は、場面研究として文化内と文化間の二項対立とその融合、参加者間の相互作用プロセス、言語以外の要素 (社会言語学的要素ないし文法外コミュニケーション要素) などを重視し、プロセスとバリエーションに関心を払う社会言語学として理解しなければならないだろう。

(村岡2006 : p.105)

村岡（2006）は、このような接触場面研究の重要性を、Welfare linguistics（徳川1999）の一部として社会に直接的に関わろうとする言語教育にとって、「問題の同定と問題化のプロセスの解明が可能になる点にある」（p.106）とする。さらに、言語管理理論においてはその言語問題は「否定的に評価された逸脱」でしかないが、その逸脱が肯定的に評価されることもあり、「逸脱がインターアクションにおいて障害やノイズとしてではなく、インターアクションを促進したり、豊かにしたりするためのリソースとして認知される場合がある」（p.109）ことに言及している。

本研究は、以上のような村岡（2006）の述べる接触場面研究のあり方を支持するものである。接触場面において参加者は、自身の母語話者性と非母語話者性を常に意識し、それを志向しながら会話を行っているわけではない。にもかかわらず、母語話者であること、非母語話者であることを所与の属性として相互排他的にカテゴリー化することは適切でないばかりか、さまざまな問題が発生する可能性があることは、先に指摘したとおりである。それらの問題を回避するためには、話者の出身地、性別、年齢、職業といった個人的属性や、スタイル、場面、トピック、聞き手との関係などによって変化することばの使い方を把握しようとするバリエーション研究、すなわち社会言語学の視点が重要な意味を持つと考える。つまり、異なる母語を個人的属性の一つと考え、接触場面を、日本語社会という言語共同体において一人ひとりがその言語資源、すなわちリソースを活用しながらコミュニケーションを行う場面と捉えるのである。

談話研究の分野では、これまで二者間のやりとりを分析データとして用いることが多かったが、近年、3人以上の多人数会話を対象とする研究も増えてきた（串田2006、熊谷・木谷2006・2009・2010、初鹿野・岩田2008、賈2008、大場2012、など）。多人数会話の場合、二者間会話の「話し手」と「聞き手」という固定的な役割を越えた興味深い現象が観察されている。そこで、本研究では、大学院の「演習」の授業における討論場面を録画・録音したデータを談話分析の対象として、日本語を母語とする日本人学生と

中国語及び韓国語を母語とする留学生によって、どのようなインターアクションが行われているか観察し、記述することにする。特に、前述の村岡(2006)が指摘したように、「逸脱」が「インターアクションを促進したり豊かにしたりするためのリソースとして認知される」(p.109) 場面に着目し、そこでどのような相互行為がなされているか、非言語行動を含めて詳細に観察し、考察する。本研究が、実験として設定された討論場面ではなく、実際の授業の討論場面を分析対象とするのは、バリエーション研究の重要な特色の一つに「自然発話重視」という姿勢があるからである(松田2015)。以上の作業を通して、異文化コミュニケーションの一局面を照射することを目指す。

以下では、2節で、本研究が分析対象とするデータを、接触場面及び教室における多人数討論場面と位置付けて、それに関する先行研究を概観する。3節で本研究に用いたデータの概要を述べる。4節では、討論場面における「逸脱」部分に注目し、非言語行動及び音声を含めて談話分析し、それが討論全体に及ぼす影響について考察する。5節で、本研究のまとめとして総合考察を行う。

2. 先行研究

本研究で扱う事象に深く関わる問題として、接触場面における多人数による討論談話を分析した先行研究を概観する。

まず、接触場面における日本語母語話者と非母語話者それぞれの談話の特徴を記述するものとして、陳(2005)、蔭山・藤井(2009)、張麗(2009)、劉(2009)が挙げられる。陳(2005)は、台日接触場面における大学生及び大学院生によるグループ討論を対象としてそのフレーム(Frame)¹に焦点を絞り、学習者の母語フレームより日本語フレームの影響が強いこと、日本語フレームが台湾人によっても行使されること、などを示した。蔭山・藤井(2009)は、大学学部留学生を対象とした口頭表現の授業に日本人学生をビジターとして招いて行われたグループディスカッションを分析し、

ビジターセッションという教室活動の有効性について論じている。また、張麗（2009）は、日本人と中国人による課題設定小集団討論を3組、各6人のデータとして収集し、中国人と日本人が「自己主張」する時のコミュニケーション・スタイルの違いを探ることを目的として、その話者交替について分析した。さらに、劉（2009）は、日本語母語場面と日中接触場面における2組ずつ各4人による話し合いの会話を対象として、その「共話」（水谷1993）の類型と話者間のインターアクションを分析し、母語場面と接触場面の特徴を比較対照している。

以上、蔭山・藤井（2009）以外は、すべて実験によるデータを対象とした論考である。

一方、地域日本語教育において「共生日本語教育」（岡崎2007）の教室実践として実施された相互学習型活動の話し合いを分析対象として、その困難点を明らかにしようとする一連の論考は、接触場面研究を教育現場と直結させる試みと言えよう（Ohri 2005a・2005b、半原2007、房・張・原田2007、金・野々口2007、など）。Ohri（2005a・2005b）は批判的談話分析（Critical Discourse Analysis）の手法を用いて、母語話者によって頻繁に繰り返される「日本人は」による「一般化」のディスコースが、非母語話者の排除につながるプロセスを記述し（Ohri 2005a）、母語話者によって非母語話者のステレオタイプが構築されていることを示した（Ohri 2005b）。房・張・原田（2007）は、Ohri（2005a）の「一般化」のディスコースに対して非母語話者は、一様に違和感や戸惑いを示すことなどを明らかにしている。さらに、これら地域日本語教育における相互学習型活動においては、非母語話者によって提起された問題が母語話者に問題として認識されないこと（半原2007）、母語話者に非対称的な力関係を示す発話行為が見られたこと（金・野々口2007）、などの困難点も指摘されている。

他方、田崎（2007・2009）は、理工系大学院の多言語を背景とした留学生と日本人学生によるグループディスカッションにおける、日本語から英語（田崎2007）、英語から日本語（田崎2009）へのコードスイッチングを分

析し、二言語使用が両者に与える影響を考察している。初級レベルの日本語へのコードスイッチングには「参加者間の関係を局所的に組み替え、多様な相互行為を引き出す働きがある」（田崎2009：p.90）という結論は、接触場面の動態を浮き彫りにして、大変興味深い。

以上概観してきたように、多人数討論場面に注目した接触場面研究は、単に日本語母語話者と非母語話者それぞれの談話の特徴を比較するに留まらず、接触場面の動的側面が注目されるようになって、多方面からその重要性が示されつつあることが理解される。

3. 分析データの概要

本研究では文教大学大学院修士課程において筆者が担当する演習形式の授業を、受講生の同意を得て録画・録音し、それを文字化したものを談話資料として用いる。以下、その授業概要について述べる。

各学生は、日本語教育、日本語学、社会言語学に関する各自のテーマを具体的に設定し、それについて調査することが課されている。各授業においては、その調査結果を1名が発表し、その発表内容について互いの意見を交換する（その際、発表者はレジユメを作成して全員に配布する）。つまり、ここでは、毎回1名の発表者を中心として、教師を含めた小集団において討論が行われていると見なすことができる。本研究のために録画対象とした授業は、韓国語を母語とする留学生（以下KNS²）2名、中国語を母語とする留学生（以下CNS）2名、日本語を母語とする日本人学生（以下JNS）2名、合計6名の大学院生によって構成されており、多人数話者による接触場面と捉えられる。参加者情報について、表1に示す。

今回分析の対象とするのは、録画した10回の授業のうちの1回、すなわち90分間の教室談話資料で、発表の担当者は韓国人留学生（以下KNS1）である。この授業では、KNS1が、自身のテーマを「割り勘について－変遷と理解方法－」と題して行った調査結果について発表し、全員で討論した。以下、談話例を示す場合の発話者については表1に従うものとし、教師は

表 1. 参加者情報

	出身地	母語	年齢	性別	日本語学習歴	日本語能力	滞日歴
KNS1	韓国 忠清南道	韓国語	28歳	男	13年1か月	超級	7年10か月
KNS2	韓国 ソウル	韓国語	23歳	女	8年	超級	3年1か月
CNS1	中国 福建省	中国語	26歳	男	13年5か月	超級	6年2か月
CNS2	中国 福建省	中国語	26歳	女	12年	超級	6年
JNS1	日本 岐阜県	日本語	57歳	女			
JNS2	日本 栃木県	日本語	23歳	男			

「JNST」と示すことにする。

4. 分析と考察

以下では、まず、4.1で分析対象とした談話の種類及び談話構造について述べる。次に、4.2で、参加者間のインターアクションを観察してその相互作用の中で起きる「逸脱」と思われる部分を取り出し、その「逸脱」が討論全体の流れにどのような影響を及ぼしているか考察する。本研究で注目する「逸脱」とは、日本語の文法や音声の「規範」に基づくいわゆる「誤用」ではなく、発話の内容が討論の流れから外れるものや、話体として「日常会話」のスタイルが用いられるなどの、「討論」という場面における談話展開上の観点に基づくものである。

4.1 「演習」という教室談話の構造

本研究が分析対象とするのは演習形式の授業であり、談話の種類として

は、「演習」という教室談話と捉えられる。はじめに、その「演習」という教室談話の性質及びその談話構造について述べ、参加者間の役割関係及び談話としての性格を、基本的な前提として確認しておきたい。

教室談話とは「教室」における教師と学生によるコミュニケーションであり、ある種の社会的制度の中で行われる「制度的談話」(institutional discourse)の一つである。中でも演習形式による教室談話(以下、「演習」談話)は、担当者による発表を中心として、その発表内容について参加者全員が討論し、互いにテーマに関する理解を深めていくことを目的とする授業の談話であり、その言語活動に期待される次のような一定の構造が存在する。まず、「導入」として教師と担当者によって当該授業時のテーマに関する確認が行われる。次に、担当者が行った調査について「発表」する。その発表が終わった後、参加者全員と担当者間で質疑応答や意見交換が行われる形式で「討論」が進行する。この討論場面においては教師が調整役として加わる。最後に、教師と担当者が「まとめ」を行う。表2は、教師、発表担当者、他の参加者の参与状況を、「演習」談話の流れに絡めて示したものである。参与状況は、「演習」談話における参加者間の役割関係を示すものと捉えられる。

表2. 「演習」談話の構造と参与状況

「演習」談話の流れ	参与状況		
	教師	担当者	参加者
(1) 導入	↓	↓	
(2) 発表			
(3) 討論(質疑応答及び意見交換)	↓		↓
(4) まとめ	↓	↓	

(高崎・立川編(2008)を参考に作成)

次に、分析対象とした「演習」談話（以下「割り勘」談話）の流れについて述べる。表3に、この「割り勘」談話の構造とその参与状況を示す。

表3. 「割り勘」談話の構造と参与状況

「割り勘」 談話の流れ	談話の内容	参与状況		
		教師	担当者	参加者
導入	テーマの確認	⇩	⇩	
発表Ⅰ	「割り勘」の辞書的意味及びその変遷		⇩	
討論Ⅰ	質疑応答及び意見交換	⇩	⇩	⇩
発表Ⅱ	現代における「割り勘」のイメージ		⇩	
討論Ⅱ	質疑応答及び意見交換	⇩	⇩	⇩
発表Ⅲ	「割り勘」に関する先行研究と対人関係問題	⇩	⇩	⇩
討論Ⅲ	質疑応答及び意見交換	⇩	⇩	⇩
発表Ⅳ	関連性理論を用いた「割り勘」の考察		⇩	
討論Ⅳ	質疑応答及び意見交換	⇩	⇩	⇩
まとめ 発表Ⅴ	発表のまとめと今後の課題		⇩	
総括	総括及び次時の予告	⇩	⇩	⇩

この「割り勘」談話は、最初に、教師と担当者のやりとりによってテーマについて確認がなされ、そのあと、担当者が4つの論点について発表し、それぞれについて参加者全員によって討論がなされる形式で進行していく。最後に、担当者が「まとめ」の発表を行い、教師が全員の感想を聞いた後、全体のコメントを加えて総括し、次時の予告をして授業が終了する。以上が全体の流れである。つまり、表2に照らして言えば、最初の、教師と担当者によってテーマが確認される「(1) 導入」部分と、最後の、担当者がまとめ、教師が総括する「(4) まとめ」部分に挟まれて、「(2) 発表」「(3) 討論」が1つのまとまりとなって繰り返される談話構造として捉えられる。さらに、「割り勘」談話の参与状況（役割関係）も、表2の「演

習」談話のそれとほぼ一致しており、「発表」の談話は担当者だけに、「討論」の談話は参加者全員によって、「まとめ」の談話は、教師と担当者及び参加者によって担われている。

そのような「演習」談話の構造と役割関係に基づく談話の流れの中で、「発表Ⅲ」の談話には、担当者だけでなく、他の参加者が加わっていることが注目される。「発表Ⅲ」の談話には「発表Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ」とは異なる参与状況が窺えることから、何らかの異変が推測される。

4.2 談話展開における「逸脱」

ここでは、表3の「「割り勘」談話の流れ」にしたがって、参加者間のインターアクションの中で起きる「逸脱」部分に着目し、その前後を含め、そこで何が行われているのか考察して、参与状況に異変の生じた「発表Ⅲ」の談話に至るプロセスを明らかにする。

まず「導入」談話で、発表の担当者であるKNS1が発表全体の流れを説明し、「割り勘をどのように理解すべきか、関連性理論を使って考察する」という目的を述べ、教師とのやりとりによって、「割り勘」という行為が文化に関わる行為であることが確認される。そのあと、担当者の発表に基づいて討論が始まる。4.2.1では「発表Ⅰ」に続く「討論Ⅰ」の談話について、4.2.2では「発表Ⅱ」に続く「討論Ⅱ」の談話について、4.2.3では、担当者だけでなく参加者全員が加わっている「発表Ⅲ」の談話について、分析する。

本研究では、使用する文字化の基準を、高崎・立川編（2008：p.127）を一部修正して以下のように示す。

- 。：直前の部分の発話が下降調の抑揚であることを示す。
- 、：直前の部分の発話が継続を示す抑揚であることを示す。
- ?：直前の部分の発話が上昇調の抑揚であることを示す。
- 一：直前の音が引き延ばされていることを示す。「一」の数は相対的な長さ

を示す。

↑↓：直後の部分における音調の極端な上がり下がりを示す。

{ }：笑いなどの非言語行動を示す。

[]：複数の参加者の発する音声の重なりが始まったことを示す。

=：途切れなく発話が続いていることを示す。

(.)：その位置にごくわずかな間隔があることを示す。

(数字)：その位置にその秒数の間隔があることを示す。

××：全く聞き取れない発話の相対的な長さを×数で示す。

(言葉)：同時に発せられた他の参加者の相づち的な発話を示す（発話数に含めない）。

4.2.1 「討論 I」の談話

「討論 I」では、「発表 I」でKNS1が「割り勘」の辞書の意味について発表したあと、「割り勘」という行為について討論が続く。

(1) は、発表者のKNS1が「割り勘」によって支払われる例として「カラオケ」を挙げたあと、その料金の支払い方法について、JNST（教師）がそれまでの情報をまとめて「1人がまとめて会計して、あとで全員が等分して支払う」ことを確認している場面である。

以下、この部分の談話展開を相互作用に注目しながら観察する。注目される発話部分を矢印と太字で、注目される非言語行動を波線で示す。下線は同じことばがくり返された部分である（以下同様）。

(1)

180JNST：会計は要するに1人が全体をするっ [て

181KNS2： [1人がやりますね

182JNST： [ことだよ。でそのあ
とは一割り勘って言ったら全員がまあ、等分にとる、払うっ
てこと { KNS2, CNS1, CNS2, JNS2うなずく }

→183KNS1： { JNSTを見ながら } カラオケ、カラオケでは (.) 1人ずつや

ります。払います。[1人で { 払うポーズで右手を何度か動かしながら }

→184CNS1: [1人でも、[だいじょうぶ。 { うなずきながら }

→185KNS2: [カラオケは、1人で1人ず

つやります (JNS1: ふーん)

{ CNS1、CNS2うなずく }

186JNST: { 笑い } そうですか、何曲歌ったっていう

→187KNS1: あ、そう [いうじゃなくて

→188KNS2: [じ、時間で、別々、時間で { CNS2うなずく }

189JNST: 時間で?

190KNS1: [部屋、

191JNST: [あ、じゃ全部全く均等ってことですか (JNS1: はー)

192KNS1: そう、全く均等です { 大きくうなずきながら } { CNS2うなずく }

193KNS2: なるべく同じプランで選んでくださいって飲み放題とかなんですけど (JNS1: あー)、つけるかつけ、まこの人はつけるこの人はつけないはだめで { KNS1首を横に振る }、部屋だったら (JNS1: あー)、おんなじ { JNS1、JNS2うなずく }

まず、JNSTの180~182までの確認に対してKNS1以外はうなずいて賛同を示したが、その間KNS1はJNSTに視線を送り続け、182JNSTが終わるのを待って、183KNS1で「カラオケでは1人ずつ払う」と応えている。「カラオケでは」の後に1秒以下の間があることに加え、右手を何度か動かして料金を支払うジェスチャーを交えていることから、KNS1は、カラオケでは「1人がまとめて会計する」のではなく、「1人ずつ払う」ことを強調していることが分かる。つまり、間を置くこととジェスチャーという非言語行動によって、KNS1は、JNSTが行った確認と他の参加者の賛同を直接否定することなく、自分の意見を主張することに成功している。

これに続いてCNS1が、183KNS1の「1人で」に重ねて「1人でもだいじょうぶ」(184CNS1)と、うなずきながら同意を示す。このときCNS1の「1人でも」はKNS1の「1人で」(183KNS1)と同時に発話されている。このような「言葉を重ね合わせる工夫によって首尾よく実現されたものとしての言葉の一致」(p.117)を、串田(2006)は「ユニゾン」と呼んでいるが、これは、KNC1とCNS1の2人がJNSTに向けて述べる「共同的ユニゾン³」(串田2006:p.137)の事例と言えよう。続けてKNS2が185で、184CNS1の「1人でも」の後に183KNS1とほぼ同じ発話をくり返している。

以上の183～185の発話連鎖は、KNS1、CNS1、KNS2の三者があたかも輪唱するように、それぞれの発話の後半部に同様のことを重ねていくという共同行為によって、三者が1つのチームとなって「カラオケでは1人ずつ別々に支払う」という情報をJNSTに伝えるものとして捉えられよう。

それを受けたJNSTは、186で1人が支払う金額は歌った曲数によることを確認しようとする。それに対して、KNS1が「そうではない」(187KNS1)と否定し、それに重ねてKNS2が「カラオケの料金は時間による」(188KNS2)という情報を加える。ここではKNS1とKNS2の二者が共同構築的に、歌った曲数によるのではなくカラオケを利用した時間による料金が均等に分割されるという新しい情報を、JNSTに向けて伝えている。

このあと、KNS2が193でカラオケの支払い方をさらに具体化して、カラオケ料金の支払い方法に関する話題はいったん収束する。この193KNS2に続く(2)の談話は、収束後の「逸脱」として大変興味深い。

(2)

194CNS2: うた歌わなくても

195KNS2: {全員がCNS2を見て} (.) 歌わなく [ても {笑い}]

196全員: [{笑い}]

→197KNS1: {笑いながら口を押えて} ちょっと [悲しい {笑い}]

→198CNS1: {笑いながら} [カラオケ行くなよ {笑い}]

→199KNS2: ちょっと悲しい {やや高い声で}

ここでは、それまで全く発話のなかったCNS2が、193KNS2の最後の「おんなじ」のあとに「うた歌わなくても」(194CNS2)と続け、たとえ歌わなくてもカラオケの料金は全く均等に支払わなければならないという情報を加えている。ここまでCNS2は、発話こそしていないが、(1)の183~185、187~188の共同構築的な発話連鎖に、うなずくという非言語行動によって参加しており、192KNS1の「全く均等です」にもうなずいて賛同を示していることから、CNS2もカラオケ体験を共有していることが分かる。おそらくCNS2は、カラオケで「歌わなかったのに料金を均等に支払わされた」経験があり、それを思い出したのかもしれない。

初めて発話したCNS2に全員が視線を向けて、しばらくCNS2の「歌わなくても」の意味を理解するまで間がある。そのあと、KNS2が笑いながら195でCNS2の発話をくり返して同意を表明すると同時に、全員に大きな笑いが起きる。その笑いの中で、KNS1が「ちょっと悲しい」(197KNS1)と述べたのは、歌わなくても同じ金額を払わなければならない人の心情を発話したものと考えられる。さらに、CNS1がその発話に重ねて、歌わないのなら「カラオケ行くなよ」(198CNS1)と述べ、そのあとKNS2が「ちょっと悲しい」(199KNS2)と、KNS1の発話をくり返して、共感を示している。

このような197~199のKNS1、CNS1、KNS2による発話は、「カラオケの支払い方法」について進行する会話の流れからは外れており、「逸脱」している。KNS1が口を押えて「ちょっと悲しい」(197KNS1)と述べたのは、その「逸脱」を意識していたためとも考えられる。特にCNS1の「カラオケ行くなよ」(198CNS1)は、「行くな」という否定の命令形に終助詞「よ」が加わった語形をとっており、「演習」談話のスタイルとしては異質である。この「カラオケ行くなよ」は、それまでKNS1、KNS2、CNS1、CNS2によって共同構築されてきたカラオケ場面の中に入り込んで、歌わない人に向けてその場で発せられた発話であると考えられる。次に続くKNS2の「ちょっと悲しい」(199KNS2)も、カラオケで歌わない人に向けたコメントとも受け取れる。

以上をまとめると、「カラオケの支払い方法」に関する討論場面において、共同構築的な発話連鎖によってカラオケでの経験が共有されていくにつれて、参加者の中に生き生きとした場面が醸成されて「逸脱」した発話を引き出し、その「逸脱」した発話がカラオケ場面における声となって共有されて、「より一体感が高められ、会話の中に共感のネットワークがはりめぐらされる」（中田1991：p.59）ことになったと言える。

4.2.2 「討論Ⅱ」の談話

次に、「討論Ⅱ」の談話における「逸脱」部分に着目して、談話を観察する。

KNS1は、「討論Ⅱ」の談話に先立つ「発表Ⅱ」で、現代における割り勘のイメージを明らかにするために片岡義男の小説『割り勘で夏至の日』を取り上げた。小説の中の代金の支払い方を中心にしてKNS1が発表したあらすじを、以下に要約する。

学生時代にバンド活動をしていた美果子、安西、野沢（2人は男性）の3人が20年ぶりに新幹線の中で再会し、ライブに出演する途中の美果子とともに駅から3人でタクシーに同乗する。予定のあった野沢がそこまでの代金を払って途中下車し、残りの代金は安西が払う。安西は美果子とともにライブ会場へ行き、料金を払って美果子のライブを楽しむ。ライブが終わった後、2人はタクシーで駅に戻るが、そのタクシー代は美果子が払う。時間に余裕のあった安西と美果子は駅のコーヒーショップでコーヒーを飲むことにする。コーヒーを注文するとき、美果子は「割り勘にしましょう」と言って100円硬貨をカウンターに置き、安西は「それはすばらしい」と言って1杯200円のコーヒーの代金を割り勘にして支払った。

以上のあらすじを紹介した後、KNS1は、美果子の「割り勘にしましょう」に対して安西が「それはすばらしい」と言ったことに注目し、次のような問題を述べている。この安西のことばから、日本社会では「割り勘」のイメージが大変良いことが窺えるが、「割り勘」を良しとしない国では、

小説の「それはすばらしい」をそのまま翻訳すると誤解が生じる。KNS1は「割り勘」を異文化コミュニケーションの問題と捉えており、討論Ⅱではこの小説の読解が中心となって進む。以下の(3)は討論に入った部分である。

(3)

→371JNST: 普通日本人どうですかJNS1さんとか。割り勘にしましょうって言ったら、それはすばらしいと [言われた。

→372JNS1: [えー? 私が払ってあげるわよーっ↓ {笑い}

373KNS1・KNS2・CNS2: {笑い}

374JNST: 200円くらいね。

なぜ安西は「それはすばらしい」と言ったのかという問題を、JNSTは、初めに日本語母語話者のJNS1に向けて「普通日本人どうですか」(371JNST)と質問している。それに対してJNS1は、371JNSTの「すばらしいと」の後に重ねて、「私が払ってあげるわよーっ」(372JNS1)と語尾を下げて、全くの日常会話のスタイルによって答えている。日本語の文体には普通体と丁寧体があり、制度的談話の一つである教室談話において学生は教師に対して丁寧体を用いるのが一般的である。この「演習」の学生たちもやはり教師に向けてはほぼ丁寧体を使っていた。372JNS1が、JNSTの年齢に近いJNS1の発話だとしても、教師が名指しで質問した答えとしてはかなり異質であり、「逸脱」している。これは、JNS1が、371JNSTの「…割り勘にしましょうって言ったら、それはすばらしい」によって小説のその場面に入り込んで、自分が安西なら「えー? 私が払ってあげるわよーっ」と言うだろうという気持ちで発したのではないだろうか。この部分はやや低めの少し押し殺したような声音で発せられ、語尾も極端に下がっていたことから、討論の発話としてではなく、「～わよ」という典型的な「女ことば」を用いて中年層のJNS1自身の声として発せられたものと考えられる。

この、日常会話そのままの「逸脱」したスタイルによって、JNS1は、安西のことばの意味が理解できないことをユーモアに伝えていると言える。これによって、KNS1、KNS2、CNS2に笑いが起き、JNSTも「200円くらい」(374JNST)と372JNS1の発話を引き取って「共話」を成立させている。374JNSTの最後の「ね」はJNS1に対する同意要求である。このようにして、(3)は、1杯200円のコーヒーを割り勘にする行為がなぜ「すばらしい」のか「よく分からない」という気持ちが、参加者に共有されていく場面として捉えられよう。

さらに、ここでは、JNSTが「普通日本人は」と言って「一般化」のディスコース (Ohri2005a) に陥ろうとする場面でもある。日本語母語話者の「えー？私が払ってあげるわよーっ」という「逸脱」した発話が、教師による「日本人は」という「一般化」のディスコース (Ohri2005a) に討論が陥るのを防いだことも、強調しておきたい。

次の(4)は、タクシー代の払い方について、CNS1が「おかしい」と言ってその理由を説明している談話である。

(4)

515CNS1: 降りるときのその、金払う、その (JNS1: うーん) 発想が、中国人から見ると、ちょっと (JNS1: うーん)、乗った分だけを、渡したんです、ですねこれは (JNST: うーん)

→516JNS1: (.) これある、日本人は

→517CNS1: { JNS1を見て } (2秒) ちょっと、ちょ、ちょっと多めに払ったりとか (JNS1: うん)、またこれから二人乗るから、ちょっと多めに払ったりとか。

518JNST: 多めに払 [う]

→519CNS1: [ん、ちょっと { 小声で }、かー、あと安西が受け取るのも、ちょっとこの発想 [も

→520KNS2: [あたし、むしろ [韓国だと、とー

- 521CNS1：{ KNS2を見て } [いやーない
んですねこれから自分が乗る場合は（ KNS1：ほー ）、自分が
払うよって [この、金を 腕を伸ばして手のひらを上げて]
- 522KNS2： [美果
子と安西が遠くまで行く途中だから払わなくて [もいいよ↓
となる（ JNS1：うーんなるほどね）]
- 523CNS1：{ KNS2に大きくうなずいてやや大きな声で } [払わない、
（.）という発想がふつうですね。
（ JNS1：うんうん ） { CNS2うなずく }
- 524KNS2：でこっちは（ CNS1：うん ）、途中だからいいよ↑って（ JNS1：
うんふんふんふん ）、どうせ通り道だから、[って（ CNS1：うん
うん ） { KNS1、JNS2、CNS2：うなずく }
- 525JNS1： [そうかそうかあそ
うか

まず、515～519でCNS1は、中国ではタクシーを途中下車する者はそこまでの料金より多めに払うか、あるいは乗り続ける者は金を受け取らないと述べ、「料金の支払い方」を文化的差異として中国側から説明しようとしている。CNS1が515で小説の支払い方を確認した後に、JNS1が516で「これある、日本人は」とターンを取って、「一般化」のディスコース（Ohri2005a）を用いている。CNS1は、JNS1に視線を向けてしばらく沈黙したが、これに応じることはなく、続けて517で中国の支払い方法を述べ、ターンを保持し続ける。さらに、CNS1は、JNSTがCNS1の発話をくり返した「多めに払う」（518JNST）を確認要求と受け取り、519で「ん、ちょっと、」と小声で同意したあと、518JNSTを引き取って「（多めに払う）かー」と続けて、乗り続ける安西が途中下車する野沢からお金を受け取るのも中国にはない発想であることをさらに加えようとする。

この519CNS1の「この発想も」のあとに、「中国にはない」が続くと予測

したKNS2が520で、519CNS1の最後に重ねて韓国の習慣について述べようとする。しかし、CNS1は、KNS2に視線を向け、途中で降りる者がタクシー代を払うのを拒むジェスチャーとして腕を伸ばし手のひらを上げて「これから自分が乗り続ける場合は、自分が払うよと言って、相手が払おうとする金は受け取らない」(521CNS1)ことを520KNS2に重ねて述べ続け、KNS2にターンを渡さない。CNS1は、KNS2に割り込まれて「あたしむしろ」(520KNS2)まで聞いたところで、自分とは異なる意見をKNS2が展開しようとしていると思ひ込み、相手の発話を否定する「いやー」を使って自分のターンを保持したと思われる。ここまで発話のターンを保持して中国の習慣について話し続けてきたCNS1であるが、522KNS2にはターンを譲っている。CNS1は、522KNS2最後の「払わなくて」まで聞いたところで、KNS2が自分と同じことを言おうとしていることに気付き、大きくうなずきながら523で「払わない、(.)」という発想がふつうですね」とKNS2に重ねて発話し、中国のタクシー代の払い方に関する話を収束させている。523でCNS1は声をやや大きくして「払わない」と述べ、そのあとに1秒未満の間があることから、「払わない」ことがKNS2と一致したことを確認していると思われる。このKNS2とCNS1のややずれた「ユニゾン」によって、中国と韓国では一般的に「タクシーを途中下車する者は料金を払わなくてもいい」ことが示されるのである。

以上のCNS1とKNS2の相互作用を見ると、519～522まではそれぞれ中国と韓国の払い方の習慣を交互に話し続け、語尾を重ね合い、ターンを取り合おうとしているかのように見える。それが、522KNS2の「払わなくても」の後にCNS1が523「払わない」をオーバーラップして、あたかも輪唱するようくり返すことによって、それまで中国側と韓国側に分かれていた2人が1つのチームとなったことが示される。523CNS1と524KNS2は、CNS1とKNS2による同じチームの成員としての共同行為と捉えられよう(串田2006 : p.137)。

さらに、ここではCNS1が、521で腕を伸ばし手のひらを上げて、そこま

でのタクシー代を払おうとする野沢に対して安西がそれを拒む様子をジェスチャーによって示したことに注目したい。このジェスチャーと「自分が払うよって」(521CNS1)という直接話法によって、タクシーに3人が同乗する場面が生き生きと描写され、それが引き金となって、KNS2による「払わなくてもいいよ」(522KNS2)、「途中だからいいよって、どうせ通り道だから、って」(524KNS2)という同じ形式の直接話法が引き出され、野沢が途中下車する場面がいつそう具体的に眼前描写されることになったと言える。

一方で、JNS1が522KNS2、523CNS1、524KNS2で納得を示す相づちを重ね、525JNS1では「そうかそうかあそうか」と述べていることから、CNS1とKNS2の説明に同意していく様子が窺える。JNS1は、(4)の516で「日本人の一般化」を試みようとしているが、CNS1とKNS2によってタクシーの中の場面が生き生きと描写されていくうちに、そのような支払い方が日本でも不自然なわけではないことに気付いたのではないだろうか。

このあとに続く(5)では、さらにCNS1とKNS1が強く共感を確かめ合っている様子が観察された。

(5)

526CNS1 : <前略> 美果子に対して安西が客、というもんじゃないですか。(JNST : うん) で客を招待するのが普通一だと自分は考えますね。で、このライブのお金払うって (JNST : うふふ) いうのがまず美果子が払うライブのお金、[お金を払う順番が { なんかうなずきながら }]

527JNST : [あ美果子が払う

→528KNS1 : [でしょー↑で

しょー↑ { 笑い } [でしょー↑ { CNS1をペンで指しながら }

→529CNS1 : [順番が { うなずきながらKNS1を指さして }、
で次はまあ、お礼として、安西がタクシー代を払うっていう
(KNS2: あーあーあー) のが、自分は。最後のこの200円はわけ

わかんないです [けどね。

→530全員： [{大笑い}]

CNS1は526で、美果子にとって安西は客なのだからまず美果子が安西のライブ料金を払うべきだ、と主張している。それに対してKNS1が528で笑いながら上昇調の「でしょー↑」を3回くり返し、それに合わせてCNS1をペンで3回指して、強い同意を示している。この528KNS1は、発表者の言語行動としては「逸脱」と言えるかもしれない。これは、先の(4)で、中国と韓国のタクシー代の払い方を共有したことによって誘発されたものと思われる。このKNS1に答えるように、CNS1も529でうなずいてKNS1を2回指さしながら意見を述べている。発表者としては「逸脱」と言える、ペンで相手を指して同意を示すというKNS1の行為が、CNS1から同様の行為を引き出し、互いが互いを指さすという非言語行動によってその共感意識の強さを示し合っている場面である。

続くCNS1の「最後のこの200円はわけわかんないですけどね」(529CNS1)は、安西と美果子による1杯200円の割り勘行為に対する発話である。「わけわかんない」はかなりくだけた日常語であり、「わからない」よりもいっそう頭が混乱する様子がイメージされ、強調効果を持つ「若者ことば」とも言える。討論の場で用いるスタイルとしては、適切とは言えない。このような「わけわかんない」に「です」を付けて丁寧体にしたのは、この場が「演習」という授業であることに対するCNS1の配慮の現れであろう。単に「わかりません」と言うのではなく、「わけわかんないです」を用いることによって、CNS1は、一定の丁寧さを保持しつつ混迷の深さをユーモアに伝えることに成功している。実際、この発話の最後に重ねて、530で全員の爆笑が起きている。

次に示す(6)は529CNS1が全員の爆笑を引き起こしたあとの談話である。

(6)

- 531CNS1：だれか払えよ {笑いながら}
→532KNS2：だれか↓。(.) 二つ頼めよと思うもんねー {甲高い声で}、
533全員：{大笑い}
→534CNS1：だれか払えよ {笑いながら}
→535KNS2：コーヒーぐらい
→536CNS2：しかも20年ぶり
→537CNS1：でしょー？ 20年ぶり、そう
→538KNS2：そう20年ぶりなのに。けちー

ここは、議論の流れとしては、安西と美果子がコーヒー1杯の料金を割り勘にして払った理由を考えるべきところである。しかし、この前の529CNS1「わけわかんないですけどね」が引き金となって、「コーヒー1杯の割り勘行為」に対する感想がくだけたスタイルで掛け合い的に次々と述べられ、討論としては「逸脱」している部分である。特に、下線で示したように、尻取りの前に前者の発話を取り込みながら発話が連鎖していることが注目される。まず、CNS1は531、534で「だれか払えよ」とくり返し、間接的に「どちらかが全額払うべきだ」という意見を述べている。ここでは「払えよ」という普通体の話しことばの形式で用いられており、「演習」談話においては異質なスタイルである。CNS1は(2)の談話でも同じ形式(198CN1「カラオケ行くなよ」)を用いているが、(6)でもやはり、「コーヒー1杯を割り勘で払う」小説の場面に入り込んで、その登場人物である安西と美果子に向けて「だれか払えよ」と発していると理解される。532KNS2でKNS2は、CNS1の「だれか」をくり返したあとに間をおいて、CNS1と同じ形式(「頼めよ」)を用いることによって、CNS1に対する強い同意を示している。この、CNS1とKNS2の類似した表現形式によって生じるチームとしての一体感は、次の534CNS1「だれか払えよ」と535KNS2「コーヒーぐらい」が「共話」を成立させていることから窺える。さらに、

そこにCNS2が「しかも20年ぶり」(536CNS2)と情報を付け加え、その重要性を強調するように、CNS1が537で強い同意を示して「20年ぶり」をくり返す。それを受けてKNS2が「20年ぶりなのにコーヒーを割り勘にするのはけちだ」(538KNS2)と、安西と美果子を評価している。最後の「けちー」は、登場人物2人に向けて発せられたことばとも解釈される。ここではCNS1、KNS2にCNS2を加えた3人が1つのチームとなって、友人間のスタイルを用いて共同構築的に「20年ぶりに会った友人同士なのだから、コーヒーの代金ぐらい割り勘にするべきではない」という意見を述べていることが示されている。

(7)はこの掛け合い的な友人間の発話連鎖の後に続く部分である。以下、538KNS2から示す。

(7)

- 538KNS2: そう20年ぶりなのに。 [けちー
 →539CNS1: [なんかこれ裏の意味がありそうで
 (JNS1: うーん)、簡単なこと、200円の問題じゃない、たぶん
 540KNS2: タクシー代払うくせになんでコーヒーだけ割るかっていう
 {JNS2: 笑ってうなずく}
 →541JNST: うんこれはだからそういう金銭の問題をこえたなんか人間関係 (CNS1: うんうん) {強く何度もうなずく} 象徴してるんでしょうねー。これだから、えーと途中で降りた野沢さんと三角関係的なものが想像されます (KNS2: あー確かに、JNS1: あーなるほど、うん) よねー {KNS1、CNS2: うなずく}
 →542CNS1: {KNS1を見て} 割り勘の問題じゃ [ないんだ {首を横に振って}、ずれた
 543JNST: [20年前に2人が好きだった {CNS1: 大きく何度もうなずいて} 女性に対する、[ねえ。で、こう
 →544CNS1: {KNS1とJNSTに視線を送って} [なんか、

あったんすね | 笑い | 前提があったからすばらしいとか言えるんです。

538KNS2に続くCNS1の539から、CNS1は（6）で3人がチームとなって述べた意見をさらに深化させて「20年ぶりなのにその行為はおかしい。何か理由があるのではないか」と気付いたことが窺える。CNS1は、541JNSTの途中で何度も強くうなずき、JNSTの発話が終わったところで確信したかのように、首を横に振りながら「割り勘の問題じゃない」（542CNS1）ことを普通体で述べ、KNS1に向けてKNS1の発表した考察の論点がずれていることを伝えている。さらにCNS1は、543JNSTの「20年前に2人が好きだった女性に対する」のところでも何度も大きくうなずいて強い同意を示したあと、KNS1とJNSTに視線を送って、544で丁寧体を用いて話を収束させている。ここで、CNS1がそれまで用いていた普通体を丁寧体にシフトしたのは、この発話がKNS1だけでなくJNST（教師）に対するものであったためであろう。さらに、丁寧体へシフトすることによって、それまで友人間のスタイルによって共同構築してきたいわば「私的な場面」から、「討論」という「公的な場面」に戻ったことを示している。544CNS1が丁寧体を用いたのは、541JNSTが丁寧体で発話してそれまでの「友人間の発話のやり取り」を「討論」の場に戻したことを理解したためと思われる。

以上をまとめると、（5）の529CNS1の「わけわかんないですけどね」に端を発する「逸脱」部分は、参加者同士が互いを引き込むようにして小説の場面に入り込んでいき、小説場面の内側からその登場人物に向けて掛け合い的に発せられた発話連鎖であったことが分かる。相手の発話をくり返したり取り込んだりしながら実現した相互行為的な「逸脱」は、参加者間のチームとしての一体感を深めていくと同時に、相互行為的に小説中の登場人物の人間関係を理解していくプロセスであったことが理解される。

友人間のスタイルを用いる「逸脱」は、次の（8）にも見られた。（8）は、「討論Ⅱ」がほぼ終わって「発表Ⅲ」に移る直前に、JNS2が話題を戻

して、発表者（KNS1）が「割り勘」として示した料金の払い方に異論を述べたあとに続く談話である。

(8)

645KNS1：ええ。ということは3番が割り勘ではないと言いたかったんだよね。

646JNS2：そうですね

647JNST：ああ [一タクシー代ね。{KNS1：笑い} あーなるほどね

648KNS1： [ありがとうございます [す。

649JNST： [行きは払ってもらったから帰りは私が払うねっていうのは、ねー、それ割り勘っていうのかっ
[てことですよ。{JNS2：腕を伸ばしてうなずきながら、笑顔}

→650CNS1：[ちょっと待ってくれよ {笑い}

651KNS1・KNS2・JNS2：{笑い} {JNS2腕を伸ばしたままKNS2と顔を見合
わせて}

→652KNS2：{笑い} ちょっと待ってくれ {笑い} {JNS2：やや下を向いて
笑う}

ここでもCNS1は、650で「命令形+よ」の形式を用いて議論の流れからは逸脱した発話を発している。これは、JNS2の心情を代弁したものと考えられる。JNSTが649で、その前のJNS2の意見を言い換えてJNS2に確認を求めたのに対して、JNS2は、笑顔で両方の手のひらを組んでその手のひらを外側に向けながら腕を伸ばしてうなずく、という非言語行動で答えている。このJNS2の非言語行動に加えられた発話が、650CNS1だと考えられる。「討論Ⅱ」の初めのころに示された「割り勘」の問題が解決されないまま次の発表に移ることはできないというJNS2の心内発話を、声として発したものが「ちょっと待ってくれよ」なのだろう。それに気づいたJNS2は、KNS1、KNS2とともに笑って、「そんなところかな」という気持ちで腕を伸ばしたままKNS2と顔を見合わせたのではないだろうか。JNS2と目があったKNS2

は652で「ちょっと待ってくれ」とCNS1の発話をくり返して、そのJNS2の心情を共有したことを示している。JNS2がやや下を向いて笑ったのは、CNS1に心情を見透かされ、その心情がその場に共有されたことに対する照れ笑いだと思われる。

ここでの「逸脱」は、日本語母語話者の非言語行動によって示された心内発話を、日本語非母語話者が声として発したものとして注目したい。

4.2.3 「発表Ⅲ」の談話

「発表Ⅲ」でKNS1は、「割り勘」に関する先行研究と、割り勘が引き起こす対人関係のトラブルの事例を紹介している。ここまでの「発表」談話では、担当者のKNS1のみが発話し、他の参加者はまったく発話せず、表2の「演習」談話の役割関係が守られていたと言える。ところが、4.2.1、4.2.2で見てきたような「討論Ⅰ・Ⅱ」の「逸脱」を経た後、「発表Ⅲ」では、発表の途中に他の参加者が「口を挟む」という現象が観察されるようになった。(9)(10)は、KNS1が割り勘に関わる対人関係のトラブルの事例について報告している場面である。

(9)

677KNS1：向井、向井(2003)によると、あー若い世代の離婚率が上昇している理由とし理由の一つとして、割り勘が含まれています。(以下中略)家事はあ妻任せの夫は、俺の方が稼いでるんだから当然だろ、分担してる、うん分担、分担してほしかったら同じ同じぐらい稼いでみろと(KNS2：ひーっ)、{JNST：笑い}、全く手伝いま[せん。

→678KNS2： [むかつくー

679KNS1：{笑い}妻は最初は疲れてるんだから私がやっあってあげようと思っていましたが、子供ができてからは、不平等感がさらに大きくなって結局離婚してしまったそうです。(以下中略)夫があ家計簿を担当しながら、自分の支出は結婚祝いなどとご

まかして、妻の支出を無駄遣い、などと批判したことから、発端、したことが発端発端で、結局は離婚に至ります至 [りました。{笑い}

→680KNS2 : [どっ
ちもどっちだ

KNS2は、678、680で、KNS1によって説明された事例1、2に対する感情をそのまま、どちらもKNS1の発話に割り込んで発している。すると、このあとJNS2が、KNS1が述べた事例3に対してKNS2と同様の発話行動を取るようになる。以下の(10)に示す。

(10)

681KNS1 : で、あその次の事例3です。〈以下中略〉夫が金がない、と言いつつ、妻はほとんどを支払うようになりました。しかし、夫に金がない理由は、あ浮気しながら、派手に、遊んだから、だということであって、それが発覚され、二人は別れるようになります＝

→682JNS2 : = {資料を見たまま} 割り勘関係ないじゃ [ん

683JNS1・KNS2・JNST : [{笑い}

→684KNS1 : { JNS2をペンで指しながら } [それ [が

→685CNS1 : { KNS1に視線を向けて } [それは浮気
じゃん↑

→686KNS1 : { CNS1をペンで指して } それが考察にある

687CNS1 : {資料に目を落として} なる [ほどね

688JNS1・JNS2・KNS2・JNST : [{笑い}

689JNST : それじゃ考察お願い [します

→690KNS1 : { CNS1をペンで指して } [それが、割り勘に関係がないと
い、{ JNS2 : 口を押えて前かがみで笑う } かのように見える、見
えるんだけど、それが割り勘に関係がある

→691CNS1：{ 上を向いて笑ってからKNS1を見て笑いながら } これは、浮気
{ 笑い }

JNS2がKNS1の報告の直後に、「事例3は割り勘には関係ない」(682JNS2)ことを「若者ことば」の「じゃん」を付けて述べると、CNS1も、KNS1のターンを奪って、JNS2と同様に「じゃん」を用いて「それは浮気ではないか」(685CNS1)とKNS1に問いかけている。JNS2とCNS1の2人はどちらも「じゃん」を用いていることから、チームとなってKNS1に対することが示され、「それは割り勘には関係がなく、単なる浮気の問題だ」という意見を共同構築していると言える。KNS1は、684ではCNS1にターンを奪われるが、686でターンを取り直してCNS1に向けて「それが考察にある」と最後まで言い終わり、これから考察することを伝えている。JNSTが689で丁寧体によってKNS1に発表の続行を促したにもかかわらず、KNS1は普通体によってさらにCNS1に向けて「割り勘に関係がないかのように見えるが、実は割り勘に関係がある」(690KNS1)という意見を主張している。おそらく、KNS1は、CNS1とJNS2がチームとなって発表途中に「横槍」を入れてきたように感じ、そのチームに対して、自分の主張を明確化せずにはいられなかったものと思われる。それまで発表の途中では普通体を用いることのなかったKNS1の感情の高ぶりが垣間見える場面である。そのあとCNS1が、上を向いて口を開けて笑って「これは、浮気」(691CNS1)と念を押ししたのは、KNS1が発表した事例が非常に具体性を持っていたためであろう。その具体性が「浮気」ということばと結びついて、くだけた日常会話のスタイルで述べ合われたことによって、この場に「笑い」を生じさせている。

この682～691までの発話連鎖は、発表内容に参加者が個人的なコメントを挟み、それに対して発表者のKNS1が普通体で応じるという相互作用によって生じたものである。「発表」の途中に参加者がくだけたスタイルでコメントを挟むという「逸脱」によって、「発表」という談話の参与状況に異変が起こったと考えられる。

このあとKNS1は丁寧に返って発表を続けようとするが、さらに阻まれることになる。

(11)

692KNS1：事例1はほんとに割り勘にかん、関係があるもの、と、思う
思われるのですけれど（JNST：うーん）、2番3番は「ちょっと
と

→693KNS2： [ほんと
に割り勘にしたいんなら、その一、奥さんが家事やる分もちゃんと計算して
るべきだと思います（JNS1：うーん）

694KNS1：家事の分担も、割り勘に

→695KNS2：もしも家の家事やってくれる人雇ったら一、ま月いくら払う
のか、それも一ちゃんとやないと割り勘にならないと思
います {JNS1：笑い}、（KNS1：あー）

693でKNS2は、692KNS1の最後に重ねて、丁寧に用いて「…と思いま
す」と、討論の場にふさわしいスタイルで自分の意見を述べている。しか
しながら、ここはKNS1による「発表」場面であり、スタイルを整えたか
らといって、途中でターンを奪って意見を述べるのは「逸脱」と言える。こ
のあと、JNSTが「KNS1さんの意見を聞いてみましょう」とKNS1の発表
を聞くように促し、KNS1は「発表Ⅲ」を述べ終わる。

以上をまとめると、「発表Ⅲ」の談話では、（9）でKNS2が感情表現
（678KNS2、680KNS2）を挟んだことが発火点となって、導火線的に（10）
の、JNS2とCNS1のくだけたスタイルによるコメント（682JNS2、685CNS1）
を引き出し、KNS1もそれに普通体で応じていくうちに、（11）では、KNS2
が、「発表」場面であることを忘れたかのように「討論」場面にふさわしい
スタイルによって自分の意見を述べるようになった。その結果、「発表Ⅲ」
は、「発表」部分と「討論」部分の境界線が不明な談話となったことが理
解される。

5. 総合考察—まともに代えて—

それでは、このようにして「発表」部分と「討論」部分の境界線が不明となった「発表Ⅲ」は、「発表」の談話として破綻をきたしているのだろうか。そうではなく、むしろ他の参加者が加わることによって、発表の内容が立体化していったのではないか。発表の途中で他の参加者がコメントを入れ、それに発表者が応じ、さらに他の参加者が明確な意見を述べていくという「発表Ⅲ」の談話は、発表者が1人で発話していたそれまでの平面的で単調な談話に比べると、参加者間の相互行為によって多面性のあるものになったと言える。教師主導でも発表者主導でもなく、参加者全員の主導による、「討論」にふさわしい談話と言えるのではないだろうか。

このような「発表Ⅲ」の談話に至る重要なプロセスが、「討論Ⅰ」「討論Ⅱ」の談話における「逸脱」であったと考える。

4.2で観察してきたように、参加者は、あらゆる手段を用いて「共感のネットワーク」(中田1991)を張り巡らしていた。その主要な戦略に、スタイルの「逸脱」がある。「カラオケ行くなよ」(198CNS1)「私が払ってあげるわよーっ」(372JNS1)「払わなくてもいいよ」(522KNS2)といった日常会話のスタイルを、声音を伴って用いることによって、その場面が生き生きと描出され、参加者がともにその場面に入り込んでいく様子が窺えた。熊谷・木谷(2010)は、直接話法の写実性に言及し、「そこに見られる直接話法や、表情と声音を伴う演技は、生き生きとしたイメージを聞き手に具体的に想起させる効果をもっている」(p.91)と述べている。「割り勘」談話においても、スタイルの「逸脱」が同様の効果をもたらし、その結果、「料金の支払い方」が国を越えて共有されていく場面((4)(5))や「小説が描く人間関係」が理解されていく場面((6)(7))が観察された。これらは、村岡(2006)が指摘したように、「逸脱」が「インターアクションを促進したり、豊かにしたり」(p.109)する事例と言えよう。

また、「共話」(水谷1993)、「共同的ユニゾン」(申田2006)、「くり返し」、「類似の表現形式」などを用いることによって、参加者同士がチームとなっ

てその成員として発話するという現象も見られた。そのチームは場面によって入れ替わり、母語が異なる参加者間でも形成されていたことから、その「一体感」は母語を越えて共有されていたことが窺える。日本語母語話者が非言語行動で示した心内発話を、日本語非母語話者が声にして発した「ちょっと待ってくれよ」(650CNS1)は、その「一体感」の顕現として捉えられるだろう。

このようにして張り巡らされた「共感のネットワーク」が、「発表Ⅲ」の談話を、参加者全員の主導による「討論」の場へ導いたと結論付けたい。

今回注目した「逸脱」以外にも、ターンの奪取がその後の談話展開に興味深い影響を及ぼす場面も見られた。また、発話数の少なかった日本語非母語話者が「笑いながら手をたたく」などの非言語行動によって討論に参加している場面なども観察された。今後は、これらの非言語行動や抑揚などの音声的特徴を含めて異文化コミュニケーションの実態を捉え、考察を深める必要がある。また、録画された10回の「演習」の授業を通して、各参加者が見せるであろう変化も、大変興味深い。すべては今後の課題としたい。

〈注〉

1. 「フレーム (frame)」(Goffman1974)について、陳 (2005)は「言語活動に対する期待が構造化されたものを指す」(p.91)と定義している。
2. 本研究では、非母語話者 (Non-Native Speaker)を表す「NNS」を用いず、韓国語母語話者 (Korean Native Speaker)の意味として「KNS」を、中国語母語話者 (Chinese Native Speaker)の意味として「CNS」を用いる。
3. 串田 (2006)は、会話者が互いに向けて同じことばを同時に発することを「相互的ユニゾン」(p.128)と呼んでいる。

〈引用文献〉

- 伊集院郁子 (2004)「母語話者による場面に応じたスピーチスタイルの使い分け－母語場面と接触場面の相違－」『社会言語科学』6-3, pp.12-26
- エリス俊子 (2000)「日本語・日本人・日本文化－読みの間隙に生まれる価値－」稲賀繁

- 美編『異文化理解の倫理にむけて』名古屋大学出版会、pp.133-148
- 大場美和子 (2012)『接触場面における三者会話の研究』ひつじ書房
- 大平未央子 (2001)「ネイティブスピーカー再考」野呂香代子・山下仁編『「正しさ」への問い－批判的社会言語学の試み－』三元社、pp.85-110
- Ohri,R. (2005a)「「共生」を目指す地域の相互学習型活動の批判的再検討－母語話者の「日本人は」のディスコースから－」『日本語教育』126、pp.134-143
- Ohri,R. (2005b)「母語話者による非母語話者のステレオタイプ構築－批判的談話分析の観点から－」『リテラサイズ』2、リテラサイズ研究会編、くろしお出版、pp.145-163
- 岡崎敏雄 (1994)「コミュニティにおける言語的共生化の一環としての日本語の国際化－日本人と外国人の日本語－」『日本語学』13-13、pp.60-73
- 岡崎敏雄 (2003)「共生言語の形成－接触場面固有の言語形成－」宮崎里司/マリオット、ヘレン編『接触場面と日本語教育－ネウスプトニーのインパクト－』明治書院、pp.23-44
- 岡崎眸監修、野々口ちとせ・岩田夏穂・張瑜珊・半原芳子編 (2007)『共生日本語教育学』雄松堂出版
- 賈琦 (2008)「小集団討論場面における話者交替の日中対象研究」『世界の日本語研究』18、pp.73-94
- 蔭山峰子・藤井みゆき (2009)「ビジターセッションにおける接触場面の談話・会話分析」『同志社大学日本語・日本文化研究』7、pp.43-59
- 加藤好崇 (2010)『異文化接触場面のインターアクション－日本語母語話者と日本語非母語話者のインターアクション規範－』東海大学出版会
- 川口良・角田史幸 (2005)『日本語はだれのものか』吉川弘文館
- 川口良・角田史幸 (2010)『国語という呪縛－国語から日本語へ、そして〇〇語へ－』吉川弘文館
- 金珍淑・野々口ちとせ (2007)「共生日本語の教室における参加者間の談話分析－非対称な力関係を示す発話行為を中心に－」岡崎眸監修『共生日本語教育学』雄松堂出版、pp.203-221
- 串田秀也 (2006)『相互行為秩序と会話分析－「話し手」と「共-成員性」をめぐる参加の組織化－』世界思想社
- 熊谷智子・木谷直之 (2006)「三者面接調査における回答者間の相互作用－同性の友人同士の場合－」国立国語研究所『日本語科学』20、pp.47-65
- 熊谷智子・木谷直之 (2009)「質問者に直接返されない回答>－三者面接における連鎖交渉－」『社会言語科学』12-1、pp.149-161
- 熊谷智子・木谷直之 (2010)『三者面接調査におけるコミュニケーション－相互行為と参加の枠組み－』くろしお出版
- 真田信治編 (2006)『社会言語学の展望』くろしお出版
- 高崎みどり・立川和美編 (2008)『ここからはじまる文章・談話』ひつじ書房
- 田崎敦子 (2007)「接触場面のコードスイッチングが参与者に与える影響－多言語を背景にした大学院生のグループディスカッションを対象に－」『異文化コミュニケーション研究』19、神田外語大学、pp.85-99
- 田崎敦子 (2009)「英語で研究活動を行う留学生に対する日本語教育の必要性－英語から

- 日本語へのコードスイッチングの働きから-」『社会言語科学』12-1, pp.80-92
- 張麗 (2009)「話者交替にみられる中国人と日本人の「自己主張」のスタイル-小集団ディスカッションを通して-」『立教大学大学院異文化コミュニケーション論集』7, pp.147-159
- 陳明涓 (2005)「台日接触場面における日本語によるグループ討論のフレーム分析-討論の骨格に焦点を当てて-」『世界の日本語教育』15, pp.91-102
- 徳川宗賢 (1999)「ウェルフェア・リングイスティクスの出発」『社会言語科学』2-1, pp.89-100
- 中田智子 (1991)「会話にあらわれるくり返しの発話」『日本語学』10-10, pp.52-63
- 初鹿野阿れ・岩田夏穂 (2008)「選ばれていない参加者が発話するとき-もう一人の参加者について言及すること-」『社会言語科学』10-2, pp.121-134
- 半原芳子 (2007)「対話的問題提起学習」の実証的研究-非母語話者の問題提起場面に注目して-」岡崎眸監修『共生日本語教育学』雄松堂出版, pp.143-185
- 樋口裕子(2009)「接触場面の話し合いに見られる日本語母語話者の調整-接触場面と非接触場面の話者交替(turn-taking)を比較して-」『大阪大谷大学紀要』43, pp.107-122
- ファン, サウクエン (1999)「非母語話者同士の日本語会話における言語問題」『社会言語科学』2-1, pp.37-48
- ファン, サウクエン(2006)「接触場面のタイポロジーと接触場面研究の課題」国立国語研究所『日本語教育の新たな文脈-学習環境、接触場面、コミュニケーションの多様性-』アルク, pp.120-141
- 房賢嬉・張瑜珊・原田三千代 (2007)「日本人は・日本は…」による一般化に対する一考察-問題提起型討論場面において-」岡崎眸監修『共生日本語教育学』雄松堂出版, pp.187-202
- 松田謙次郎(2015)「英語から見た日本語のバリエーション-変異理論を中心に-」『日本語学』34-3, pp.50-59
- 水谷信子 (1993)「[共話]から[対話]へ」『日本語学』12-4, pp.4-10
- 村岡英裕 (2006)「接触場面における問題の種類」村岡英裕編『多文化共生社会における言語管理接触場面の言語管理研究vol.4』千葉大学大学院社会文化科学研究科研究プロジェクト報告集vol.129, pp.103-116
- 森純子 (2004)「第二言語習得研究における会話分析: Conversation Analysis (CA) の基本原則、可能性、限界の考察」『第二言語としての日本語の習得研究』7, pp.186-213
- 劉佳珺 (2009)「多人数会話における共話的なインターアクションの分析-日本語母語場面と日中接触場面の対照-」『ことばの科学』22, 名古屋大学言語文化研究会, pp.97-116
- Firth, A. & Wagner, J. (1997) On discourse, communication, and (some) fundamental concepts in SLA research. *Modern Language Journal* 81, pp.285-300
- Goffman, E. (1974) *Frame Analysis: An essay on the organization of experience*. Boston: Northeastern University Press
- Neustupny, J.V. (1994) Problems of English Contact Discourse and Language Planning. *English and Language Planning: A Southeast Asian Contribution*. ed. by Thiru

「文学部紀要」文教大学文学部29-1号 川口 良

Kandiah and John Kwan-Terry. Center for Advanced Studies, National University of Singapore : Times Academic Press, pp.50-69